

## 学校トイレの洋式化

学校のトイレの洋式化改修が進められている。児童生徒の健康や衛生面での環境改善、集中力向上などの効果とともに、コロナ禍における感染症対策としても注目されている。

文部科学省によると、2020年9月時点で、全国の公立小中学校で日常的に使われているトイレ約136万個のうち、洋便器は約77万個で「洋便器率」は57・0%となった。43・3%だった前回の調査（16年）に比べ、13・7ポイントの大幅上昇で、洋便器と和便器の比率は逆転した。家庭では洋式トイレが主流となる中、駅や高速道路などの公共施設では、現在も和式トイレが多い。このため、教育上の観点から一部は和式トイレを残す必要があるなどの声もあるが、トイレ整備に対する教育委員会の方針を調査した結果では、「洋便器を多く設置する方針」との割合が前回から約3ポイント上昇し、約88%を占めた。三重県をみると、洋便器率は54・4%と全国平均を下回ったが、前回調査の41・5%から12・9ポイント上昇した。

県教育委員会では、県立学校のトイレ改修について、国の補助金を活用したり、校舎の改修時に併せて実施したりするなどして、順次進める計画という。

地域の防災拠点でもある学校施設のトイレ洋式化は、災害時の避難所機能の強化にもつながる。また、洋式化と併せて床面を湿式から乾式（ドライ方式）にすることで、清掃の最後に水をまく作業が不要となり、雑菌が繁殖しにくくなるため、感染リスクの低減策としても、今後、トイレ改修の必要性はさらに高まると見込まれる。

公共施設（棟数）の約4割を占める学校施設の老朽化対策は、全国で喫緊の課題となっている。厳しい財政状況ではあるが、ポストコロナの「新たな日常」の実現に向けて、計画的かつ継続的な環境整備が望まれる。

（コンサルティング事業部 PPP/PFIグループ 主任研究員 小林 ゆかり）